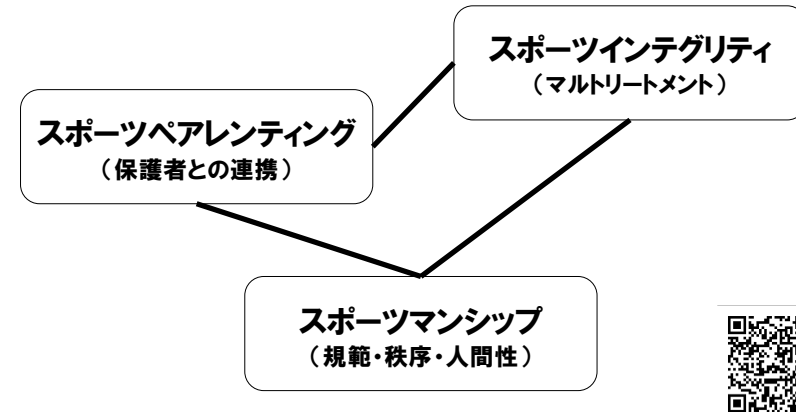


子どもの未来に責任を持つ

豊田 則成

株式会社アイアイ 認知行動コーチ



暴言暴力の根絶を目指して

- 議論を風化させてはならない
- まず10年間は議論し続けよう
- 暴言暴力の根絶は必須課題
- 社会的な責任を帯びている

コーチも苦しんでいる

- 何をどのように苦しんでいるのか、見える化する必要がある
- その苦しみは他の人々を苦しめていることもあるかも
- 時には人を傷つけてしまうことも

「技術指導」よりも「心の支援」を

- 子どもはコーチを信頼している
- 子どもを保護し癒していく
- 子どもを深く理解する(心の伴走)
- 学び続け、議論し続ける

毎日誰かしら殴られてたし、試合中とかも……。本当にどれだけ殴られたか
ってくらい殴られた。私がキャプテンだったのもある。……。髪の毛引っ張ら
れたり、蹴られたりもした。……。 (顔) が殴られすぎて青くなって。……。血
が出たことも。……。でもその先生のこと、(今も) 好きだし……。 (当時)
私のことプレイヤーとして信頼してくれてるなという感じもすごくしてた
し、私の助けになろうともしてくれていた。……。みんな嫌いじゃなかった
(でも) みんな、本当に先生のこと怖くて。……。 (酷い指導者に関して言う
と) DV 被害者の心理と似ていて、アメとムチではないけど、愛情と虐待の
両方を感じてた⁵。

「数えきれないほど叩かれて」

日本のスポーツにおける子どもの虐待

何十年間も、日本の子どもたちは、トロフィーやメダルの獲得のためという名の下に暴力を振るわれ、暴言を浴びせられ続け
てきた。日本のスポーツには、体罰の歴史がある。今回の新調査により、学校や地域からトップレベルまで、スポーツを
する子どもたちが暴力や性虐待、暴言の被害に遭っており、生涯にわたる心的外傷を受けていることが明らかになった。

「『数えきれないほど叩かれて』：日本のスポーツにおける子どもの虐待」は、オリンピックやパラリンピックを含む、
800人以上（50人以上のインタビュー調査と、オンラインアンケート調査での757人の回答）について、子どものときのス
ポーツの体験を調査してまとめた。オンラインアンケート調査では、少なくとも50競技、45都道府県での経験についての回
答があった。顔を殴られたり、蹴られたり、バットや竹刀で殴られたり、水分補給を禁じられたり、首を絞められたり、
ホイッスルやラケットでぶたれたり、性虐待や性的嫌がらせを受けたなどの訴えがあった。近年、日本で改革が行われてい
るものの、このような虐待が「当たり前」のこととされ、選手がアクセスできる通報相談窓口や救済措置が整っておらず、
日本の学校スポーツから競技団体傘下のスポーツやトップレベルのスポーツまでアカウンタビリティ（責任追及）が不十分
であることを、本調査は明らかにした。これにより、加害者である指導者が、他の選手にも危害を加え続けている。

日本が2021年7月に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックに向けて準備を進めているいま、日本の現状に対する
世界の関心は、スポーツをする何百万もの子どもたちを守るために日本国内の法制度そして世界の政策を変える、またとな
い機会となる。

現行 学校教育法 第11条

**学校長及び教員は、教育上の必要が
あると認めるときは、監督官庁の定め
るところにより、学生、生徒および児童に
懲戒を加えることができる。但し、体罰
を加えることはできない。**

強いチームによくある光景

あるチームでは、強い圧力をかける指導が横行していました。

ベテランと呼ばれる年代の指導者が、子どもの行動を常に監視し、少しでも枠から外れるような行動をとると大声で怒鳴ったり、力づくで行動を静止したりすることを繰り返していました。その指導は、チーム全体に浸透しており、若い指導者たちも「こうすれば、子どもたちは言うことを聞く」といった間違った成功体験を積んできました。また、審判に対して過剰なクレームを呈することが試合に散見されました。

子どもたちの表情に笑顔はなく、指導者に怒鳴られることで頻繁にパニックに陥る子どもや、毎回の練習へ「行き渋る子ども」が続出していました。ところが、指導者による苦しさを子どもたちはなかなか訴えることはできません。「行き渋る」ことは「親の甘やかした」と保護者が責められることもあります。保護者にとってこのようなチームは我が子を「人質にとられている」現場であり、申し立てることさえできないまま、時間だけが過ぎていきました。

すると、子どもたちは、強い圧力をかけなければ動かなくなっていきました。これでは、子どもたちは楽しくないばかりか、本来あるべき自主性が育まれません。

子どもたちは発展途上にある

- 奥行き知覚・動体視力(未完成)
- 周辺視・図と地の分化(未完成)
- 聴覚記憶(コーチからの指示を把握する)
- 聴覚弁別(指示や声援と雑音の聴き分け)
- 相手を打ち負かすことよりも、自分のベストを尽くすことを重視する(不安と自信)

指導の現状【各方面への傾聴から】

- 子どもへの人権侵害
- リスペクト精神の欠如
- 審判への過剰クレーム
- 強ければいいという勝利至上
- マルトリートメントの横行

児童虐待防止法(略称)

- 正式 児童虐待の防止等に関する法律
- 虐待(Abuse: アビュース) 大人から子どもへの発達を阻害する行為全般
- ①身体的虐待(暴力・体罰)、②性的虐待、③心理的虐待、④ネグレクト
- 保護者が対象(だからこそ厄介！)

マルトリートメント

違法ではないが不適切な関わり

児童虐待の予防等に関する法律

□ 児童虐待予防法

- ① 身体的虐待 → 身体的マルトリ
- ② 性的虐待 → 性的マルトリ
- ③ ネグレクト → ネグレクト
- ④ 心理的虐待 → 心理的マルトリ

チャイルド・マルトリートメント

18歳未満の子どもに起こるあらゆる種類の身体的・心理的・性的虐待とネグレクト、商業的またはその他の搾取を行うこと、さらに責任、信頼または権力の関係の文脈において、子ども
の心身の健康・発達・大人・対人関係などに害をもたらすこと。(世界保健機関 WHO)

おとなの不適切なコトバ(1)

- 質問形式で問い詰める(答えようがない)
- 「何回言われたら分かるの？」
 - 「どうしてそういうことするの？」
 - 「ねえ、何やってるの？」
 - 「誰に向かってそんな口のきき方をするんだ？」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.35 引用】

おとなの不適切なコトバ(2)

- **本当の意図を語らず、裏を読ませようとする(指導者の思い通りに動かそうとする)**
 - 「やる気がないなら、やらなくていい」
 - 「もう勝手にすれば」
 - 「好きにすればいいじゃん」
 - 「やりなさい」「勝手は許さない」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.35 引用・改変】

おとなの不適切なコトバ(3)

- **脅して動かそうとする(脅迫・威嚇)**
 - 「早くしないと、〇〇させないから」
 - 「じゃあ、〇〇できなくなるけどいいんだね」
 - 「もうみんなとは〇〇させられない」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.35 引用】

おとなの不適切なコトバ(4)

- **虎の威を借る(だから、やっちゃいけないよ)**
 - 「お母さんに言うよ」
 - 「お父さんを呼ぶよ」
 - 「〇〇コーチに怒ってもらうからね」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.36 引用・改変】

おとなの不適切なコトバ(5)

- **下級生と比較する(侮辱、軽視、バカにする)**
 - 「そんなこと1年生もやりません」
 - 「そんな子は1年生からやり直してください」
 - 「幼稚園に戻りたい？」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.36 引用】

おとなの不適切なコトバ(6)

□ 指導者側に責任がないことを強調する

「ダメって言ったよね」

「もうやらないはずだったよね」

「さっき約束したばかりだよ」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.36 引用】

おとなの不適切なコトバ(7)

□ 見捨てる(無視、放置、ネグレクト)

「じゃあ、もういい」

「さよなら」

「バイバイ」

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.37 引用】

おとなの不適切なオコナイ(1)

□ 高圧的な指導、大声で怒鳴る

指導者の過度な期待に、子どもを無理矢理に応えさせようとしていないか。

成果が実現しない焦りから、高圧的に迫り、子どもが指導者の顔色ばかりをうかがっていないか。威圧によって、子どもをコントロールしようとしていないか。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.16-37参考】

おとなの不適切なオコナイ(2)

□ 目を合わせない、笑いかけない

一度も言葉を交わさずに、一日を過ごしてしまうような子どもはいないか。

指導者は、限られた時間の中で「心の安全地帯」となっているか。目を合わせ、笑いかけることで、「見ているよ」「大丈夫だよ」という安心感を子どもに与えているか。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.39 要約引用】

おとなの不適切なオコナイ(3)

□ こどもを放置する(無視する)

一生懸命、指導者にアピールしてきているのに、その子どもを無視していないか。

子どもの積極性や努力を「正しく評価されていない」という気持ちは、こころを燻らせ、指導者への不信感を募らせる。その場の流れに合わないからといって無視してはイケナイ。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.40 要約引用】

おとなの不適切なオコナイ(4)

□ 正当な理由もなく参加させない、一方的に練習から排除する

「上手くできないなら見ていなさい」と伝えるのは「指導者としての役割の放棄」や「子どもの排除」を意味する。

苦手さを理解し、スモールステップで子どもに自信を持たせてあげることが肝心である。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.42 要約引用】

おとなの不適切なオコナイ(5)

□ 必要な賞賛をしない、成長を価値づけない

「よく頑張ったね」と子どもの努力を認め、「できたね！よくやった！」と子どもを賞賛することはとても大切である。

子どもの成長に関心を抱く一方、励ましなどの適切な言葉がけを放棄してはイケナイ。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.42-43 要約引用】

おとなの不適切なオコナイ(6)

□ 必要な情報の提供や共有を怠る

子どもについての悩みや苦勞を他者と共有しないことは「可能性の放棄」にもつながる。

「自分には自分のやり方がある」は諸刃の剣。確かに、それが功を奏することもあるが、「こどもの関わり」は社会的な営みであり、「独善的」「独裁的」であってはならない。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社、p.43-44 要約引用】

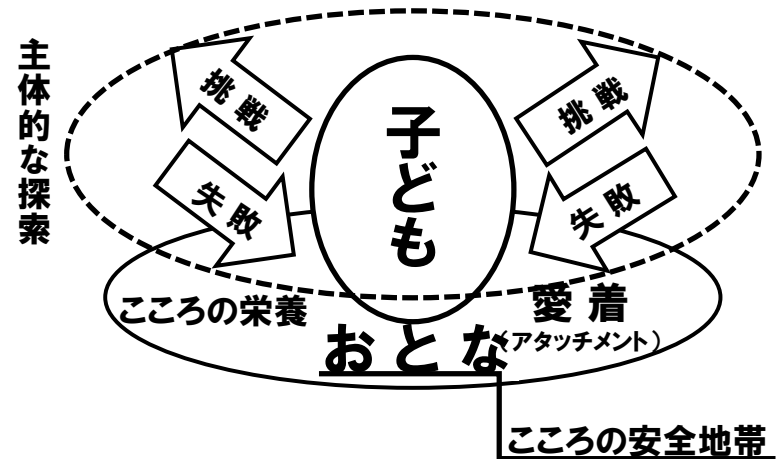
おとなの不適切なオコナイ(7)

□ 子どもの気持ちや心理的な危機に気づけていない

「本来怠ってはいけない危険の察知ができていない」ことも大きな問題である。

危険を放置すること、例えば、熱中症が危惧される中で水分補給を怠ったり、いじめを放置することも絶対にあってはならない。

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社。 p.45 参考・引用】



アタッチメントの作り方

- 目を合わせる
- 笑いかける
- 語りかける
- 触れ合う
- 感謝を伝える
- 努力や過程を認める



自分のことを
気にかけてくれている
↓
自分のことを
分かってくれている
↓
安心して
挑戦することができる

【川上康則 2022 教室マルトリートメント、東洋館出版社。 p.180-181 要約引用】

健全な『絆』を深めていく

- 子どもを指導すると同時に、子供からも学ぶという姿勢を有する(相互性)
- 『やる気』を引き出す(動機づけ)
- 押付けるのではなく、子どもと一緒に
なって価値観・文化を作り上げていく